

聖書和訳とヘボン

岡 部 一 興

はじめに

本稿のテーマは、「聖書翻訳とヘボン」である。ヘボンの本名は James Curtis Hepburn という。1859年10月18日に来日、ヘップバーンの発音が庶民にはヘボンと聴こえたらしく、ヘボンは自ら『和英語林集成』に漢字で「平文」と書き庶民から親しまれた。ヘボンは妻のクララ (Clara) とともに、1859 (安政6) 年10月17日神奈川沖に到着、翌日米国領事ドールの世話で成仏寺に住居を定めた。61 (文久元) 年8月クララ夫人は帰米、63年3月アメリカから日本に戻り、横浜居留地39番において、同年秋から英学塾を開いた。62年12月から一時、ヘボン自身が大村益次郎ら幕府の委託生を教え、64年には運上所の一室で S. R. ブラウン (Brown, Samuel Robbins), J. H. バラ (James Hamilton Ballagh), タムソン (David Thompson) らと英語その他の科目を教えたことがあった。そして、ヘボンと共にクララ夫人は英学塾を運営していくことになるのである。⁽¹⁾

日本における聖書翻訳を考察すると、キリシタン時代はさておき聖書翻訳は、カトリックよりプロテスタント教会の方がより積極的であった。プロテスタント教会における最初の聖書翻訳はギュツラフ (Gützlaff, Karl Friedrich August) によってなされ、1837年に『約翰福音之傳』

と『約翰上中下』が出版された。その後、S. W. ウィリアムズ訳(Williams, Samuel Wells)の『馬太福音書』、カトリックが琉球から退却した後、1846年琉球海軍伝道会のベッテルハイム(Bettelheim, Bernard Jean)が派遣され琉球語で4つの福音書の翻訳、そしてS. R. ブラウン、ヘボン等の漢訳聖書からの聖書翻訳がなされた。

さらに1874年3月から委員長S. R. ブラウンのもとにヘボン、D. C. グリーン(Greene, Daniel Crosby)を中心として共同訳の新約聖書の翻訳がなされ、79年11月に翻訳が完成した。1871年5月、バプテスト教会のゴープル(Goble, Jonathan)が平仮名による木版刷りの『馬太福音書』を翻訳出版、この平仮名主義を引き継いだN. ブラウン(Brown, Nathan)が新約聖書の個人訳を推進し、共同訳より数ヶ月早く翻訳を完了させた。さらにヘボンを委員長として旧約聖書の翻訳に取り掛かり、1888(明治21)年2月3日東京築地の新栄教会において完成祝賀会が行われた。

ここに共同訳の翻訳委員会が決定してから15年の歳月が経過し、新約と旧約の両方の訳業に携わったのは、ヘボンひとりだけであった。この旧新約聖書のことを「明治元訳」といっている。その後、聖書改訳の動きが出て、1911(明治44)年1月改訳委員会が発足、1917(大正6)年2月新約聖書の改訳を終え、同年10月に出版された。これを「大正改訳」という。しかし新約聖書の改訳はなされたが、旧約聖書の改訳はなされず太平洋戦争後に持ち越された。

以上日本における共同訳を中心とする聖書翻訳の流れを概観したが、李樹廷が命がけて聖書翻訳をした朝鮮と同じように、江戸時代の幕末物情騒然とした社会にあってキリスト教が認められない時代に、言語をどのように訳すかが定まっていない時代であって、またギリシャ語やヘブル語の原語に熟練した日本人がいないなかであっての翻訳は想像を超えたものがあったと思われる。そのような状況の中で、ヘボンはどのよう

な動機によって聖書翻訳に取り掛かり、なぜ共同訳の聖書でなければならなかったのか、その聖書翻訳においてヘボンがどのような役割を担ったのか。どのようにして聖書翻訳に取り掛かって行ったのかを考察しようとするものである。

1. 『和英語林集成』と聖書和訳

日本において宣教師たちが伝道する時に、何を媒介にして教会と結びついたのであろうか。そこでは聖書が重要な働きをした。日本における聖書翻訳においては、S. R. ブラウンとヘボンの貢献が大きく、二人は聖書を日本人にもたらしことを最大の目的としていた。最初の東洋伝道に旅立ったヘボンは1841年7月シンガポールに入港した。ここでギュツラフ訳『約翰福音之伝』（ヨハネ伝）に出会った。

1832年日本の遠州灘で米の輸送船宝順丸が遭難、漂流すること14カ月、岩吉、久吉、音吉の3人だけが助かり、アメリカ・ワシントン州のフラッター岬南方に漂着、原住民に酷使されているところを救助され、やがてマカオでギュツラフがこれらの漂流民を使って日本語の聖書翻訳を行なった。⁽²⁾ 1837年に『約翰福音之傳』と『約翰上中下』が出版された。ギュツラフは、英国商務庁の通訳官としてマカオに滞在中、遠州灘で遭難した小野浦の漁民岩吉、久吉、音吉と出会った。彼らから日本語を学びながら「約翰福音之伝」を編纂したが、これは最初の和訳聖書であった。当時の状況は、『神天聖書』とメドファースト (Medhurst, Walter Henry) の字彙しかなく、キリシタン訳の存在も知らず、宗教思想も貧困で表現力、語彙も不足していた漁民を日本語教師にしていた関係で、訳は素朴で、時に意味不明な訳も出てくるという苦心のあとが見られる翻訳であった。『神天聖書』は、1823年モリソン (Morrison, Robert) が同じロンドン宣教会のミルン (Milne, William) の協力で刊行した最

初の漢訳旧新約聖書である。1834年モリソンの死後、メドファースト、ギュツラフ、ブリッジマン (Bridgman, Elijah Coleman) などが改訂し、1837年に『救世主耶蘇新遺詔書』が出版された。ヘボンは『約翰福音之傳』をシンガポールで入手して、長老派ミッション本部に送ったが、のちに来日した時、この書を持参した。

さてヘボンの『和英語林集成』であるが、この辞書は和英・英和辞書である。幕末から明治にかけて各分野に大きな影響を与え、「後続の辞書の規範」となり、19世紀の代表的な辞書と言われている。さらに注目すべきことは、現代の辞書でも『新潮現代国語辞典』と小学館『日本国語大辞典』にヘボンの語彙や用例が数多く掲載されているのを見ることができ、その功績は多大であるといえる。『和英語林集成』出版の目的は、来日宣教師や英語を勉強する者たちが日本語を習得するための手引き書として編纂したものである。同時に聖書と和訳にあたりどのように日本語に翻訳するかということがヘボンにとって重要な問題であった。ヘボンは来日にあたり、船舶の中で、また来日して日本語教師を探し日本語研究に余念がなかった。⁽³⁾

ヘボンは1861年春から宗興寺で施療をはじめた。眼科、内科などの治療にあたり、患者は一日100人から150人に上り大盛況であったが、5カ月で閉鎖を命ぜられた。その後ヘボンは62年12月横浜居留地に移転、63年5月に施療を再開することになる。その間『和英語林集成』の基礎作業に集中するのであった。62年のヘボン書簡では、「二年近くの間、それらをわたしの主な仕事としてまいりました。会話や一般文字に出てくるわずかの例外を除いて、考えつく膨大な数の言葉、すべてを集めております。そして意味を把握し、参照等のために、日本の本を読んでまいりました」。⁽⁴⁾ こうして、患者から聞き取った単語や散歩で出会った人から聞いた言葉を英語に置き換えてノートに書き連ねていった。

ヘボンにとって最大の問題は莫大な出版費用であった。ヘボンはアメリカ長老派教会のミッション・ボードに出版費用を掛け合ったが、伝道事業として認められず暗礁に乗りあげた。その時、横浜居留地でウォルシ・ホール商会 (Walsh Hall & Co.) を経営していたアメリカの友人ウォルシが救いの手を差し伸べた。ヘボン書簡には、「アメリカの友人の一人で、ウォルシ・ホール商会のウォルシ氏から、親切にも辞書の印刷出版に必要な一切の資金を立て替えてくれました。そしてもし収支つぐなえない場合に、あらゆる金銭上の損失を負担してもよいとの申し出がありました」⁽⁵⁾ と記述され、辞書の印刷出版に関し金銭上の損失を負担するとの申し出がヘボンに寄せられて出版をすることができた。

当時日本では活版印刷は難しく、上海に出かけて作業しなければならなかった。ヘボン夫妻は、1866年10月18日横浜を出発、上海で印刷にとりかかった。のちに東京日日新聞の主筆となった岸田吟香と一緒に上海美華書院まで出かけ、翌年5月まで出版作業に携わった。岸田吟香は日本字がないと版下を書いて工具と活字を作る作業をした。吟香の「呉淞日記」⁽⁶⁾ によると、67年3月ヘボンから「対譯辞書」の本の扉に書名を書くように言われ「和英詞林集成」と書き記したが、2日後の日記では「和英語林集成」の扉紙の版下を書くとなっているので、吟香が書名を付けたのが分かる。

ヘボンは生きた日本語の言葉を『和英語林集成』に取り入れた。その一例を見ると、眼科疾患では近眼、ハヤリ目、サカサマツゲ、文例としては「目にごみが入る」、「目に薬をさす」、解剖学の用語では大腸、胃、胃袋、脳みそ、背骨、神経といった単語をみることができる。人間の動きを捉えた文例では、「金さえあればいつも極楽 (ゴクラク)」、「金を惜しくて使わぬ (オシイ)」、「うらみが心に満ちる (ミチル)」、「威張ってひとを見下げる (イバル)」などを挙げるができる。ヘボンは「美しい田園を散歩するのが大好きであった」と言い、街路では子供たちが

彼に「オハヨー」「アナタ」「ジキジキ」「ドジン」「バカ」等と「無礼な言葉」で挨拶する。そこにはヘボンが庶民と親しく対話する姿がみられて面白い。ヘボンは会う人ごとに「コレハナンデスカ」と問いかけ、それをノートに綴っていった。こうしてヘボンは、患者や庶民に接触し、生きた言葉をこの辞書に取り入れていった。

1867（慶應3）年5月日本最初の和英辞典である『和英語林集成』が出版された。同じ年にロンドンのトリュブナー社から『和英語林集成』のロンドン版が出版され、この辞書の良さが世界中に広まった。初版は和英558頁、英和282頁、日本語は2万語にのぼった。最初予定になかった「英和」の部を書き上げ、第一篇「和英」の部が250頁、第二編「英和」の部が250頁から300頁になり、67年6月1日までに完成したいと、上海で1月25日付の手紙に書いている。初版は上海で印刷、横浜で出版、その価値が知られて売れていった。再版は1872年上海で印刷し、横浜で刊行され、さらに第3版は1886年東京の丸善から刊行し、語数は35618語に上った。明治43年には9版を重ね、何と初版から50年もの間辞書の寿命が保たれたのは驚くべきことであった。かつて、ヘボンを知る早矢仕^{ハヤシユウテキ}有的が医者^{ハヤシユウテキ}を辞めて書店丸屋を開業、丸屋から丸善商社となり、86年ヘボンはその版權を丸善に譲渡し、2千ドルを受領その譲渡金を明治学院に寄付、3階建てのヘボン館が建設された。

英語など外国語からの訳語がままならぬ時代に、いち早く辞書の編纂に着手したことは注目に値する。この日本に聖書をもたらすためには、その基礎作業としてどうしても辞書の編纂が不可欠であったことを表わしている。今日この辞書は、英学史上貴重な文献であると同時に、近代日本語研究の上にも重要な資料を提供している。

ヘボンがなぜ『和英語林集成』の編纂に取り組んだのかというと、彼はキリスト教禁制下にあつて日本語の勉強に力を注ぎ、聖書の日本語訳を手掛ける基礎的作業として辞書の編纂に取り組み、と同時に後から

来る宣教師や外国人のために、英語を学ぶ日本人のために便利な辞書の編纂を思いつき努力を重ねていった。ヘボン書簡によると、「聖書を日本語に翻訳するということが、わたしどもの最も重要な事業であると、わたしどもすべての者が感じております。ですから、日本語の知識を習得し、日本語の書物を読んで、その任務に適するよう努力している次第です。わたしどもの語学の進歩は遅いし、文法や辞典や翻訳などに関し、人の助力を得ることもできず、やむ得ずわたしども自らやるほかありません。けれども非常に励まされ、前途洋々たるものがあります。わたしどもの日本語の教師が少しの苦勞なく読み、そして理解しうる立派な漢文の聖書が手許にあるから、聖書翻訳事業に助けとなっております。」⁽⁷⁾

聖書を日本語に翻訳するのが、「わたしどもの最も重要な事業である」と述べ、そのためには「聖書の日本語訳を手掛ける基礎的作業としての辞書」の編纂が不可欠であった。1867年初版の序文において、この辞書を作成するにあたり参照したのは、メドハーストが1830年にバタビヤで出版した『英和和英語彙』、1603年にイエズス会宣教師が出版した『日葡辞書』であった。しかし、その大部分はヘボンが出会った人々から得た生きた言葉を丹念に集めて編纂したものであった。

2. 漢訳聖書からの翻訳

1846年3月、ヘボンは5年間の困難な中国伝道を終えて失意のうちにニューヨークに帰った。それから13年間ニューヨークで医院を開業、医者として名声をはせた。しかし、彼はその地位を捨て日本伝道に赴くことになった。その際、シンガポールで入手した『約翰福音之傳』をミッション本部から取り戻し来日の際持参した。ヘボンは日本語の勉強と施療をするかたわら、1861年春頃からマルコ伝の翻訳に取り掛かった。海老沢有道が指摘しているように、⁽⁸⁾ その翻訳は漢訳聖書からの転訳で

あった。宣教師たちは、この時点では日本語に熟達していないし、日本人助手も外国語に対し英語でさえ習得していないということで、双方が解釈し、意思が通じる言語は中国語聖書であった。

「わたしどもの日本語の教師が少しの苦勞なく読み、そして理解し得る立派な漢文の聖書が手許にあるから、聖書翻訳事業に助けとなっております。ブラウン氏とわたしとは、マルコ伝を翻訳する上に大切な手引としてのこの漢文の聖書を、日本語に訳し直すことによって、さらに多少の進歩を見たのです。」⁽⁹⁾

その中国語聖書は、モリソン訳の『神天聖書』（1823年）だったのか、ブリッジマン・カルバートソン訳の『新約聖書』（1859年）だったのか確証できないが、普及度から見るとブリッジマン・カルバートソン訳のそれであった可能性が強いと思われる。ミッションに送った手紙の中でも、聖書を翻訳することが、「最も重要な事業である」と考え、ヘボンは日本語の読書に励んだ。しかし、漢文の聖書があるので非常に助かるといっている。

「わたしどもは日本語の辞書を調べ、単語や熟語をたくさん集め、これを訂正したり、これに付け加えたりしました。また日本語をもっと知りたいために、日本人の書いた本を幾冊も読んでいます。日本語でどの程度の仕事ができるか、試すためにマルコ伝を日本語に翻訳することを始めました。この翻訳をやってみて、中国における宣教師たちの訳したすばらしい漢訳聖書によって、非常な助けを受けたことを発見いたしました。実にこれは偉大なる助力でありました。それは日本語の聖書の基礎となっているのです。日本語の聖書は漢字に日本語の格や動詞の語尾を挟んで熟語を作って文章を綴ったものであります。」⁽¹⁰⁾

1862年10月4日付のヘボン書簡では、日本語教師に時間を割いて漢文から日本語に聖書の翻訳をさせている。そして「マルコ伝、ヨハネ伝、創世記および出エジプト記の一部を訳出した」と報告し、日本語教師と

の共訳の形で翻訳を進めていた。一方同時期のS. R. ブラウンの動きをみると、1862年2月18日付書簡では、「大部分の時間を、日本語の研究に費やしました。とにかく、わたしは日本語教師の協力を得て、マルコによる福音書とヨハネによる福音書を、又創世記を、日本語に翻訳しました。」⁽¹¹⁾と報じている。この動きをみるとヘボンとブラウンは同じ聖書の箇所を翻訳していることが分かり、彼らが個人訳ではなく共同訳聖書を志向していることが翻訳の動きを見ると分かるのである。では、この翻訳した聖書を彼らはどのように考えていたのだろうか。そこでは極めて慎重に翻訳を進めているのが分かる。

「日本語の知識にもっと精通するまでは、聖書の翻訳文の出版はできないと思っています。聖書のうちのある書の翻訳はすでにヘボン博士とわたしのふたりでやってみました。しかしこれを印刷にかける考えはありません。以前から多く読み、注意深い研究をしていますが、まだ多くの改訂をしなければなりません」⁽¹²⁾と述べ、何度も何度も改訂を加えながら今の時点で完全なものを発行したいという考えが伝わってくるのである。

漢訳の聖書は、日本語訳聖書が出版されるまで数多く輸入されていた。ヘボン等も漢訳聖書の普及に努めた。聖書はわかりやすい文章であることが大切である。それが庶民に大衆に聖書が広く読まれる基本であるとヘボンは考えていた。ヘボンとS. R. ブラウンは中国語ができたので漢訳聖書を参考にしてきた。しかし漢訳聖書が読める社会層は一部の知識階級に限られていた。「漢籍を読み得る日本人の数は非常に少数で、その数についての意見はまちまちです。しかし、大人の漢籍読書力から察しても、大体判断して五〇分の一に足りないと思います」⁽¹³⁾と述べるほど一部の知識層に限られていた。そこで聖書を日本国民すべてに読んでもらうには、平易な標準語による日本語訳聖書が必要であった。グリフィス (Griffis, William Elliot) が書いたS. R. ブラウンの伝記には

聖書翻訳についてブラウンがどのように考えていたかが分かる記述がある。

「聖書翻訳者が熱望していたのは、『国民に理解されるばかりでなく、文学的作品として人びとの心を引きつけ、やがて欽定訳聖書が英語を使う諸国民に影響を及ぼしたのと同じように、日本国民の精神を感化する標準書となる聖書の日本語訳をつくること』であった。」⁽¹⁴⁾

1871(明治4)年ヘボンとS. R. ブラウンと馬可伝(マルコ伝)を訳し、1872(明治5)年の秋出版、つづいて同じ年に約翰伝(ヨハネ伝)を出版した。これらの訳は、和漢の学に長じていた日本人最初の牧師奥野昌綱の力によるところが大きいといわれている。当時は未だ木版刷りしか国内にはなく、活版印刷は普及していない時代であった。最初に出版されたマルコ伝は、第一版1000部がたちまち売り切れ、遠く神戸や長崎の方まで送られたという。こうした木版刷りは、禁教下ゆえ慎重かつ秘密裡に行われた。次の引用は安藤劉太郎という密偵が上司小栗憲一に「耶蘇教探索報告書」として提出したものの一部である。

「一、ヘボン帰港已來彼約書和訳出板之義ニ付即チ奥野又右衛門ナル者之周旋ニ依テ東京横浜間之板木師ヲ搜索候処或ハ方外之作料ヲ申シ立ル者アリ或ハ国禁ヲ犯シ後患アランコトヲ怖ル、者アリテ至急右之事不行届ニ付奥野モ殆ト当惑仕居候処先達而東京住吉町二丁目稲葉儀平ナル即チ高砂屋某之紹介ニ依テ半紙壹枚ニ付金壹円二朱之作料ヲ以テ引請ケ既ニ馬可伝之壹巻ハ粗出来之条此次二者約翰伝等追々取掛候条搜索仕候尤モ右稲葉モ国禁之義ヲ余程恐怖候由之処右者奥野ヨリ万件相引請ケ万一非常之節ハ吾等正ニ其罪ニ蹈ルトモ決メ板木師ニ毫モ難題ヲ掛ケ間敷扨ト重々説得候ニ付漸ク稲葉モ極密承諾右之事ニ取掛候…」⁽¹⁵⁾

誰も版木を受けつけてくれる者がいなかったが、奥野昌綱は高砂屋某なる人の紹介により版木師稲葉治兵衛(儀平)を捜しあてることができた。万が一問題が起きた場合には、一切の責任をもつと言って稲葉を説

得し、当時では高額の作料を半紙1枚1円2朱と定め依頼した。普通の版木ならば堂々と店先で昼間から仕事にとりかかれたが、禁書であったため恐らく店をしめてから夜中ひそかに一字一字、力をこめて聖書の言葉を刻んで行ったものと思われる。この稲葉治兵衛は、後に1882（明治15）年4月横浜住吉町教会が南小柿洲吾（当教会最初の長老）を牧師に迎え入れる時に、教会総代として招聘委員の一人に選ばれている。彼がいつ頃信仰をもったか定かでないが、多分奥野に懇願されてことわるわけにもいかず黙々と彫り続け、自問自答するうちに次第にキリストの十字架の福音にふれて、信仰に導かれていったものと考えられる。

聖書和訳と同時に日本人にキリスト教を理解してもらうために、ヘボンはキリスト教のイロハを教える書物を出版したいと思うようになった。その最初の試みはマッカーティー著『真理易知』の和訳であった。それは1855（安政2）年に出版されたものであるが、日本での出版が禁教下で難しかったので、その頃出版の準備が整っていた『和英語林集成』とともに、1866（慶応2）年10月上海に赴き『真理易知』の版木を持参して出版にこぎつけたという。その後、1872（明治5）年頃『三要文』を出版、これは十戒、主の祈り、使徒信条の三つを分かりやすくまとめたものであった。これらの書物は各教会で信仰を導く入門書として使われていた。

ヘボンは誰でもが読めるような翻訳を考えて作業を進めたが、そこには困難な問題があった。第一には日本語の問題が考えられた。なぜなら日本語が定まっていなかったからである。各地域には方言があり、武士の言葉、町人の言葉、男、女の言葉など、それに加えて文体も漢字にするか、仮名にするか、文語体にするか、口語体にするかというように困難な状況にあった。そこで考えられた基本的な考え方は、いわゆる標準語に基づく翻訳が聖書の普及にとって最良な道であると考えた。この考え方はヘボンだけの考え方ではなく、S. R. ブラウンも、のちに共同

訳の聖書翻訳に関わった宣教師たちの考え方であった。第二には聖書に頻繁に出てくる専門用語をどう訳すかという基本的な問題があった。例えば、神や愛という語を考えても西洋的な意味での考え方が全くなかったので非常に苦労したのである。

3. 共同訳聖書

ヘボンの考えでは、聖書はどこまでも平易な「標準語」で訳されるべきで、個人訳を推進した教派もあったが、あくまでも共同訳を目指していた。その点では、S. R. ブラウンとヘボンは完全に一致していた。S. R. ブラウン、ヘボンの考えもさることながら、和訳に関してはアメリカ聖書協会から日本にいる宣教師が協力し翻訳したものをお互いに比較し批評し合う必要があるということが指摘されていた。1872（明治5）年9月20日から25日にかけて、第一回宣教師会議が横浜居留地39番のヘボン邸で開かれた。その時決議された中心議題は、教会合同の問題、共同訳聖書の編纂、教派によらざる神学校の設立、讃美歌の編纂であった。教会合同問題は、一番難儀であった。何とかS. R. ブラウンのリーダーシップによって、日本基督公会という無教派主義による教会の設立を決議した。この教会形成に関する分析は、ここでの目的ではないので他の機会に述べることとする。⁽¹⁶⁾

この翻訳委員会を立ち上げるについて、各ミッションから選ばれるはずの委員が一向に決まらず、翻訳委員社中が動き出したのは1874（明治7）年3月以降であった。委員にはヘボン、S. R. ブラウン、D. C. グリーン、それに聖公会からC. M. ウィリアムズ（Williams, Channing Moore/アメリカ）とG. E. エンサー（George Ensor/CMS）、アメリカ・メソジスト監督教会からR. S. マクレー（Maclay, Robert Samuel）、アメリカ・バプテスト教会からN. ブラウンが加わった。ウィリアムズ

とエンサーは事情があって参加せず、代って聖公会からパイパー (Piper, John/CMS) とライト (Wright, William Ball/SPG) が参加した。しかし、翻訳委員社中が動き出してまもなく、パイパーもライトもマクレールも委員を辞した。またN. ブラウンは訳語の問題で一年半の後委員を辞任した。結局、ヘボン、S. R. ブラウン、D. C. グリーンの三人が訳業の中心になっていった。⁽¹⁷⁾ それらの宣教師に三人の日本人協力者が就いた。それは奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎の三人で、あくまでも宣教師の補助的存在であった。

翻訳委員社中が発足した頃は、週4日、2時から5時まで横浜居留地39番のヘボン邸に集った。翻訳委員社中で最後までその責任を務めたのは、ヘボン、S. R. ブラウン、D. C. グリーンであった。社中とは、『和英語林集成』を引くと「なまうち」という意味がある。彼等は、できるだけ早急に誰でもが読める聖書を国民に提供することが自分たちに課せられた責任であり、使命であると認識していた。翻訳委員社中は1875 (明治8) 年に『路加伝』を出版しているが、その『路加伝』翻訳の様子を伝えるヘボンの書簡がある。

「いまわたしのおもな働きは聖書の翻訳です。わたしは五人の翻訳委員の一人です。この委員は一週間のうち四日、午後二時から五時まで、この目的で会合します。わたしどもは、いま、ルカ伝第七章にかかっています。一節を訳すにも頑固な意見や見解の相違で議論が多いので遅々として進みません。しかしよくやっています。この他に、わたしは一週間二回、施療所を開いております。あらゆる種類の患者が大勢来ます。」⁽¹⁸⁾

共同訳聖書の翻訳作業において厄介なのは、訳をめぐる意見が分れ共同作業が前進しないことであった。そのためいくつかの規則を定めていた。議論が15分以上にわたってまとまらない時は次の会に回す。出席の3分の2以上の同意があれば、その論議は中止することができる

といった具合である。

ヘボンは1876（明治9）年春39番の診療所を閉鎖、ジョン・バラ（Ballagh, John Craig）がその建物を譲り受けてバラ学校（ヘボン塾の後身）を開始した。これを契機にヘボンは、聖書和訳に専念する。S. R. ブラウンの体が弱ってきたこともあったのか、ヘボンが横浜居留地山手245番地に引っ越した後と思われる頃から翻訳委員社中の会合を山手211番のS. R. ブラウン邸に移した。ヘボン邸でやっていた時は、ヘボンが患者を診ていたこともあって午後を集っていたが、ブラウン邸で行うようになってからは午前中に変わった。S. R. ブラウンの書生をしていた井深梶之助が、その当時翻訳委員会がどのような形で会合を持っていたかを述べている資料がある。

「翻譯委員は日曜日土曜日の外は毎日午前九時から十二時迄会合して委員の一人が先に起草した所の翻譯に就て評論採決した。或時は半日懸って漸く一節二節を決定した事も稀でなかった様である。会合の場所は横浜山手二百十一番ブラオン博士住宅の東南の一室で室の中央に一脚の丸テーブルがあってその周囲に三人の翻譯者と三人の輔佐役とが夫々着席して評論をしたのであるがそのテーブルの上を開いてある書物はブラオン氏とグリーン氏の前には二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英譯の新約注解書、日本人の前には文語や官話やその他の支那翻譯の聖書といふ風であった様に記憶する。然してブラオンの輔佐が高橋氏、ヘボンのが奥野氏、グリーン氏のが松山氏で時として随分議論に花が咲いた事もあった様である。自分は当時ブラオン先生の内に書生をして居て屢々会合の席に出入した許でなく未熟ながら先生の使徒行伝の翻譯の手伝をもしたので、四十余年後の今日當時を追想すれば六人が丸テーブルを取囲で議論を上下して居る光景は目に見えるやうな気がする。」⁽¹⁹⁾

聖書翻譯委員会が日本語に翻譯する時どのような原書を使って翻譯をしていたのだろうか。これについては、次のような批判がある。田川

建三氏の著書『書物としての新約聖書』のなかで、聖書をどのように訳したかということで次のような指摘をしている。それは「英語の重訳みたいなものだ」という批判がある。この考え方は、案外一般市民に受入れ安いところがあると言わなければならない。具体的にこの書の言わんとしている所を引用すると、一時聖書共同訳の翻訳委員会のメンバーであり、わが国最初の新約聖書を著したネーザン・ブラウンの『志無也久世無志與』⁽²⁰⁾を引き合いに出して、「原典からの訳ではありえず、一応原典も眺めているのだろうが、基本的にはドイツ語や英語からの重訳であった」⁽²¹⁾と断言している。またヘボン、S. R. ブラウン、D. C. グリーン等に対し、「これらの宣教師たちのギリシャ語やヘブライ語の語学力がどの程度のものか今更知る由もないが、結果から見れば、後述するように、どのみち事実上はほとんど英訳からの重訳みたいなものだった」という。⁽²²⁾さらに、「19世紀後半の日本で17世紀はじめのイギリスで用いたギリシャ語のテキストが手に入るわけがない。つまり、実際は欽定訳に合わせて訳分を作っていたのである。」⁽²³⁾

では、事実はその通りなのであろうか。ギリシャ語のテキストが日本に入るわけがないと言うが、宣教師たちはギリシャ語の原典である『Textus Receptus (テキストウス・レセプトゥス/1516年エラスムスにより作成されギリシャ語聖書として印刷) を実際に使用していたのである。バプテスト派のN. ブラウンは1833年から23年間ビルマ、アッサムにおいて、アッサム語の新約聖書の翻訳を経験したすぐれた伝道者である。『志無也久世無志與』の文献には沢山のギリシャ語聖書を使用したことを記している。彼が著した巻頭につけられた文献を見ると、5世紀のアレキサンドリア大文字写本までを用い、加えてシナイ、ヴァチカンなどの4世紀から10世紀までの10種の大文字写本と10世紀以降の小文字写本が記載されている。N. ブラウンは、ヘボンやS. R. ブラウンのように中国語を解していなかったので、まさにギリシャ語原典からの

翻訳であった。米国バプテストの急進派は、1850年聖書翻訳団体アメリカ・バイブル・ユニオン（American Bible Union）を起し、「新興の聖書本文批評学に基づくギリシャ語原典による原典語訳」の方針の下で「欽定訳」改訂運動を始め、1863年『ユニオンバイブル新約聖書』を出版、N. ブラウンはこの流れにある宣教師であった。⁽²⁴⁾

この流れは、1870年に英国において「改正訳 Revised Version・1881」翻訳事業をもたらすことになる。1874年3月聖書翻訳委員会の活動が動き出した時に、英国では『欽定訳』の改訳が始まっていた。というのに日本の翻訳委員会は依然として、それ以前の『欽定訳』に準拠した形で走り出していたので、新しいギリシャ語原典に基づく方針の下でやり直すことは困難が伴った。というのは宣教師たちは日本語に熟達していないし、日本人助手は英語の理解もままならず、ましてギリシャ語の理解は全くなかったので、中国語聖書が唯一双方に通じる言語であったと言っても過言ではない状態であった。そこで、前述のABUの『欽定訳』の改訳運動に精通しているN. ブラウンを招くことによって、『欽定訳』の聖書を底本にしなが、『欽定訳』改訳の底本にも配慮していることを示すことによって英本国をはじめとする国に対応したのである。⁽²⁵⁾

S. R. ブラウン書簡には、この問題についてN. ブラウンに相談し、翻訳委員会への協力を承諾してくれたとの報告がなされている。「バプテストの同僚者、N. ブラウン博士の協力は、得られないと思っていましたが、わたしが、同博士に事業を話したところ、わたしたちといっしょになって、できるかぎり助力することを承諾してくれました」⁽²⁶⁾

次にS. R. ブラウン、ヘボン、D. C. グリーン等の翻訳委員会の翻訳は、「事実上はほとんど英訳からの重訳」であると指摘していることについて考察したい。ここでもS. R. ブラウンやヘボンたちのオリジナル資料である書簡からその事実を探りあててみたい。1865年10月6日のS. R.

ブラウンの書簡によると、「今、マタイによる福音書の翻訳文を、一語ずつ、ギリシャ語と対照して、最も注意深く訂正しています。その成果について、ある程度の満足を感じています。なお創世記の翻訳をしていますが、これも同じように訂正したいと思っています。私の同労者たちも、少なくとも、何人かは、聖書の翻訳に従事しています。」⁽²⁷⁾ また同年10月31日の書簡においても次のように述べている。「彼らは、まず、漢訳の聖書を開いて、できるかぎりよい訳をします。それから、わたしは、ギリシャ語またはヘブル語の原典と照らして、彼らと一しょにいて訳文を調べ、手元にある聖書を、わたしの力の及ぶかぎり、最も適当な訳文に訂正するのです。こんなふうには訂正して彼らのきれいに書いていたページがきたなくなるまで添削します。」⁽²⁸⁾

S. R. ブラウンの略歴を見ると、1810年6月16日にコネチカット州イースト・ウィンザーに生まれた。マサチューセッツ州モンソン・アカデミーで学び、18歳の時アマースト大学に入学するも、学費が出せず中退、エール大学を卒業、その後ユニオン神学校を卒業した。昨年筆者がオーバン神学校⁽²⁹⁾のカリキュラムを調査して分かったことであるが、ヘブル語は1年生の時習得するが、カリキュラムの中にギリシャ語の講座がない。と言うことは、ギリシャ語はそれ以前に習得しているということを示している。ブラウンの例で言えば、モンソン・アカデミーでギリシャ語を学ぶのが普通なのである。従って、現在の日本では、初めて神学校に入ってからギリシャ語、ヘブル語を学ぶわけであるから相当努力しなければ自分のものにならないのであって、当時のアメリカで学ぶ神学生とはレベルが違うことが分かった。

ではヘボンの場合はどうであろうか。ヘボンが旧約聖書を翻訳していた1884年12月26日付ヘボン書簡によると、「もし日本人がヘブル語やギリシャ語を理解していたなら、外国人の手を煩わす必要はありません。しかし、もし日本人にそれができなければ、外国人ができるかぎり

最善の翻訳をし、それに原語の意味の説明を十分してから、日本人の助手に渡すべきであります。(中略)しかしわたしどもの翻訳はヘブル語から訳したものです。わたし自身はヘブル語に精通していませんが、しかしその言葉を味読するくらい知っており、理解しています。難解な箇所につかつた場合には、種々、多くの手引きがあります。たとえばギリシャ語の旧約聖書、ラテン語の聖書とか、フランス語の聖書その他、幾冊かの原文批評注解書を参照いたします。」⁽³⁰⁾

ヘボン は1815年3月13日ペンシルバニア州ミルトンで生まれた。家系はスコッチ・アイリッシュと言い、スコットランドからアイルランド北部アルスター地方に渡り、1773年ヘボンの父方の曾祖父サムエル・ヘップバーン (Samuel Hepburn) が息子をフィラデルフィアのサスケハンナ川の支流まで行かせ、1784年には自らアメリカ大陸に移住した。教派的にはプレスビテリアン (長老派) と呼ばれるスコットランドのカルヴァン派で国教会から弾圧された。エディンバラ大学を卒業したデイヴィッド・カークパトリックという校長の下で、小・中学校教育を受け、16歳でプリンストン大学に入り、卒業後ペンシルバニア大学医科を1836年に卒業している。当然カークパトリックのもので、ギリシャ語を学び、ラテン語やフランス語を学んだと考えられる。またプリンストン大学時代総長のアシュベル・グリーンに呼び出されて古典の重要性を正され、ラテン語・ギリシャ語を学び直し、またヘブル語まで学んだと言われている。と言うことを考えると、少なくともギリシャ語は問題なく、ヘブル語は難解な箇所になった場合、「味読するくらい知っている」ということで、他の言語を参照しつつ翻訳に取り掛かっているのが分かるのである。⁽³¹⁾

4. 分冊出版された新約聖書

翻訳委員社中は翻訳が完了したのから順次分冊にして出版し、その数は17冊に上った。⁽³²⁾ 新約聖書全体の翻訳が終わったのは1879（明治12）年11月3日、最終原稿は12月1日であった。病のため帰国していたマサチューセッツ州モンソンに住むS. R. ブラウンのもとに完成の電報が届けられ、S. R. ブラウンはその電文を何度も何度も見ていたという。翌年4月19日東京新栄橋教会において完成祝賀感謝会が行われ、長年の夢が実現した。1874（明治7）年3月から始まって、5年8ヶ月の年月を費やした。ヘボンが成した漢訳聖書からの和訳から数えると実に20年近い歳月が流れていた。聖書翻訳の訳業において中心的な役割を果たしたのはヘボンであった。しかし、ヘボンはそのことを誇りとし名誉なことと思っても、それを自分がなしたのだと言う人ではなかった。ただ「自分が企てたことにしがみついてコツコツとやって、やり通した」結果であったのだという。聖書翻訳に従事していたヘボンの考え方が手紙から読み取れるので次に引用しよう。

「わたしどもはいま黙示録の最後の章にかかりました。あと二度会議を開いて、新約聖書の改訂を終わらせたい。そうできれば、わたしはうれしい。この改訂、いやむしろこの翻訳に五年半ばかりかかりました。立派な翻訳だと思います。こうした仕事に従事したことは本当に名誉です。こういう仕事に召されたことを考えて、わたしは驚嘆の思いにみたまされているのです。あの辞典の編さんがもたらしたこの国における主の本義を伝えるべき導火線的な役目と、この聖書翻訳の事業とは、日本人、外国人のいずれを問わず、この国語を学ぶものとともに、わたしどもすべての宣教師同労者一同の感謝であります。主がわたしを用い給うこと以外わたしは何らの功績もありません。この成果はわたしが他の人々よ

りも才能があった為ではありません。否、学識と文才においてわたしは同労者の多くの方々にはとても及びません。もし、わたしが何かを完成したとするならば、それはわたしが勤勉であったことと、自分が企てたことにしがみついてコツコツとやって、やり通したことです。わたしのよな貧しい器を用いて、わたしがなそうとしたことを成就せしめ給うたことを主に感謝するのです。主にのみすべての讚美と栄光といまも永久にあらんことを一。』⁽³³⁾

ではこれらの聖書和訳の原本はなんだったのだろうか。当時S. R. ブラウンの書生をしていた井深梶之助の証言がある。

「第一は何を正本として翻訳すべきかといふ問題であった。是は頗る重大な問題であるが、之に就ては大した議論もなく、ゼームス王欽定英譯（テツキスタス、レセプタス）の原本に依ると定められたやうに承知する。乍然当時知られた丈の最古の原文を参酌した事は申す迄もない。且又申す迄もない事であるが、現在の日本譯は英訳の重譯ではなく全く原文を日本語に翻譯したものである。それに付ても遺憾千萬なのは、当時日本人に原文に通じた者の無かった事である。是は固より事情不得止事ではあるが、輔佐者達は諸種の支那譯と翻譯者連が不完全なる日本語を以て原文を口譯する所を参酌して日本文に直すより外に致方は無かったのである。縦令原語に精通せずとも多少原語を解し且英語に精通した日本人が委員中に加はって居たならば非常に便利であつたろうと思われる。併し甚だ失敬な申條であるが、それにしては現在の日本譯は実に能く出来たものと思ふ。我が基督教会は勿論我が国民も以上六氏の功勳は永く記憶し感謝すべきである。第二には文體の問題であった。現今では時文という者も略形が定まった様であるが、明治七、八年頃は未だ時文といふべき形もなく在来の片假名交り或は漢文崩しか將た和文かの中を取る外なかつたのであるが、孰れも一得一失で、その選擇に就ては翻譯委員は頗る苦心した痕跡が見える。又之と關聯した問題は、漢字を本文

とするか振仮名を本文とする乎といふ問題であった。此点に付ても翻譯者と輔佐者との間に大分議論があったやうだが、遂に振仮名が本文と定まった。その精か現在の譯には振仮名なしに読下すことの不可能なる句や、又無理に読下せば甚だ奇妙なる文句が出来る所もあるやうである。」⁽³⁴⁾

分冊の聖書は次の順序で出版された。

『^{ルカ}路加伝』ヘボン訳、1876年96丁（米国聖書会社）

『^{ヘブライ}希伯来書』ヘボン訳、1876年、31丁（米、北英国聖書会社）

『^{マタイ}馬太伝』ヘボン訳、1877年1月、95丁（米、北英）

『^{マルコ}馬可伝』ヘボン訳、1877年4月、61丁（米、北英）

『^{ヨハネ}約翰伝』ヘボン訳、1877年6月、83丁（米）

（改正）1878年5月、83丁（米、北英）

『^{シトギョウデン}使徒行伝』ブラウン訳、1877年9月、103丁（米、北英）

『^{ロマ}羅馬書』ヘボン訳、1877年、41丁（米、北英）

『^{ヨハネ}約翰書』グリーン訳、1877年6月、16丁（米）

『^{ガラテヤ}加拉太書』グリーン訳、1877年12月、16丁（米）

『^{コリント}哥林多前書』ヘボン訳、1878年8月、44丁（米、北英）

『^{コリント}哥林多後書』ヘボン訳、1878年9月、27丁（米）

『^{エペソピリピ}以弗所腓立比書』ヘボン・ブラウン訳1879年6月、15, 11丁（米、北英）

『^{テサロニケ}帖撒羅尼迦前後書』ヘボン訳1879年6月、6丁（米）

『^{コロサイ}哥羅西書』グリーン訳、1880年4月、11丁（米）

『^{テモテ}提摩太前後提多腓利門書』ヘボン・ブラウン訳、1880年4月、11, 8, 5, 3丁（米）

『^{ヤコブベテロ}雅各彼得前後猶太書』1880年4月、11, 12, 7丁（米）

『^{ヨハネモクシロク}約翰黙示録』ブラウン訳1880年4月、46丁（米、大英）⁽³⁵⁾

共同訳の新約聖書翻訳をみると、全体の6割以上がヘボンによって翻訳されているが、同時期に来日したS. R. ブラウンもここに上がってい

る翻訳以外に福音書は、翻訳している部分があるし、ヘボンが訳したものを必ず目を通して改訂しているので、その意味では確かにヘボンが訳した部分は多いが、ともに足並みをそろえて翻訳してきたという意味では共同の制作という意味合いが強いと思われる。1874年3月25日から「翻訳委員会」の翻訳活動が開始されたが、3日後の27日にN. ブラウンは翻訳委員会から招きを受けて列席している。1875年1月11日『ルカによる福音書』の翻訳が完了、そこで『バプチゾー』問題を取り上げている。小澤三郎は『幕末明治耶蘇教史研究』のなかで、「聖書和訳史上における『バプチゾー』和訳の問題」と言う論文でこのことを取り上げている。ギリシャ語の「バプチゾー」の訳語をめぐる、翻訳委員会では「洗礼」か「バプテスマ」のどちらかを選ぶとした提案に対し、46名が投票し、ヘボン、マクレイ、ニコライ、コレル、ウイリアム（聖公会）等は「洗礼」に投票（16票）、S. R. ブラウン、グリーン、カ克蘭、ワデル、N. ブラウンは「バプテスマ」を選んだ（30票）。小澤はヘボンと激しく対立、N. ブラウンは「浸め」に固執して譲らず脱会したとしている。しかし、書記のD. C. グリーンが書いた議事録には⁽³⁶⁾、その後の翻訳委員会には、N. ブラウンが出席しており、喧嘩別れで脱会したというのであれば、その後の委員会に出席しないはずである。N. ブラウンは、その一年後のロマ書の翻訳まで留まっており、脱会したのは1876年1月27日のことであったことから判断して、ヘボンと激しく対立したというのは疑わしいと言わなければならない。ヘボン書簡集でも、N. ブラウンに対し「博士はこの地でミッションのため、新約聖書の翻訳をして、なかなか立派な働きをしています」⁽³⁷⁾と述べ、その学識を高く評価している。またS. R. ブラウンもN. ブラウンとの交友が深かった。N. ブラウンを訪れては、聖書翻訳上のアドバイスを受けたという。⁽³⁸⁾

ここで問題だったのは、翻訳者だった宣教師たちは日本語に堪能で

あったわけではなく、一方日本人には原語を解するものがいなかったことである。補佐をした高橋五郎、松山高吉、奥野昌綱らは優れた素養の持主であったが、翻訳委員ではなく単なる補佐役でしかなかった。海老沢有道は、日本人補佐らが翻訳の作業で依存したのは、ブリッジマン・カルバートソンが漢訳した『旧新約全書』であったであろうと指摘したうえで、「翻訳が日本の文学・思想界のなお低調な時にあって」、明治期以降後世にこの聖書の訳文が大きな影響を与えたのは、翻訳に当たった委員と委員を補佐した日本人たちの涙ぐましい努力があっての事であるといっている。⁽³⁹⁾

N. ブラウンの最大の功績は、『志無也久世無志與』を出版したことである。同じバプテスト派のゴープルが禁教下の1871年に『摩太福音書』(マタイ)を刊行、N. ブラウンはこれを引き継いで1879年8月1日に翻訳を完了、同年12月までに2巻本にして新約全書が出版されたようである。一方翻訳委員会の新約聖書は分冊の形で17分冊が刊行されたが、すべての訳業が完成したのは1879年11月3日で、N. ブラウンより3カ月遅かった。N. ブラウンは翻訳委員会の訳業を意識して、それより一日でも早く完了させることを考えていたのである。しかもN. ブラウンの聖書は活字体で印刷されたものであったのに対して、翻訳委員会訳の聖書は、木版刷りであった点においても優れていた。⁽⁴⁰⁾

N. ブラウンの聖書和訳についての第一人者川島第二郎氏は、わが国最初の新約聖書で、数冊しか存在しない稀覯本である『志無也久世無志與』を覆刻させた。ブラウンはABUの『欽定訳』改訳運動に連動した最新の聖書本文批評学に基づいたギリシャ語原典による翻訳を追求した。前述したように4世紀の写本を含めてギリシャ語の原典に基づいている点を考えると、「翻訳委員会」のメンバーの誰よりも優れた訳者であったことが理解できる。⁽⁴¹⁾ しかもN. ブラウンは日本語の国際化のために世界語の統一表記法「コズミック・アルファベット」を生み出し、

平仮名連続活字分かち書きによる訳で、行間に注を付け、難解な語句の説明や外国の固有名詞にルビがつけられている。しかしこのような先進的な考え方で作られた聖書は、バプテスト教会の中では普及したものの、時期尚早のため同じ宣教師にも、日本人にも理解されず、平仮名の聖書として低く見られ庶民用としてしか使われず、広く全国に普及しなかった。

5. 旧約聖書とヘボン

これより以前1876（明治9）年10月30日、東京に在留する各派の宣教師が築地に集まって聖書翻訳の事について協議したことがある。その会合に出席したメンバーは米国長老派のD. タムソン, W. インブリー (Imbrie, William), O. M・グリーン (Greene, Oliver M), スコットランド・一致長老派のW. C. デビットソン, H. フォールズ, H. ワデル, J. M. マクラレン, 監督派（聖公会）のJ. パイパー, W. B. ライト, A. C. ショウ, カナダ・メソジスト派のC. S. イビー, G. カクラン, 米国メソジスト派のJ. ソーパーなどで、これを東京翻訳委員会と呼んでいた。しかし、この委員会はその費用を大英国外国聖書会社、スコットランド聖書会社が負担するもので、教派的にもイギリス系教派の宣教師に偏ったところがあった。⁽⁴²⁾

やがてアメリカン・ボード・ミッションの提案により1878（明治11）年5月10日と13日の両日東京築地のユニオン・チャーチにおいて宣教師会議が開かれて、旧約聖書の翻訳については一般の宣教師の協力によって遂行されるべきであるとの取り決めを行った。そこで各ミッションより一人ずつ代表が選ばれ、常置委員会が新発足した。そのメンバーはN. ブラウン, J. H. クインビー, G. カクラン, J. C. ヘボン, S. R. ブラウン, W. B. ライト, H. ワデル, J. ゴーブル, F. クレッカー, R. S.

マクレー、D. C. グリーン、J. パイパーの12名であった。1878年10月23日、この新常置委員会は組織を整え、東京翻訳委員はその必要がないとしてその前の6月に解散した。東京翻訳委員は解散されたが、1877年タムソンの試訳に基き委員会が修正して『旧約聖書創世記』が発行された。またショウ、プランケット、パイパーらの手によってヨナ、ハガイ、マラキ書が訳され、1879年米国聖書協会から『旧約聖書約拿哈基^{ヨナハガイ}マ^マラ^ラキ^キ書』が出版された。新しい常置委員会はこのような先行研究を参考にしつつ新たな訳を目指すことになった。

なお横浜新約全書翻訳委員の事業については継続することとした。新常置委員会の委員長にヘボン、書記にカクランを決め、さらに未刊の新約聖書全般に亘り奥野昌綱の力を借りて訳稿の訂正を加え、1880年に出版に漕ぎ着けた。その一方で、旧約聖書の訳業が進められた。旧約聖書は、1882（明治15）年から順次出版されて1887（明治20）年には全て発行された。

1883年5月に超教派の集会である第3回基督教信徒大親睦会が開かれた頃を前後して、日本人教職者たちは、旧約聖書の翻訳にあたって単なる宣教師の補助者ではなく、聖書は日本人の手で翻訳したいという思いから訳業に参加することを表明し、宣教師会議において承認された。79年に刊行されたパイパーが翻訳したヨナ、ハガイ、マラキ書、ファイソンのヨシア記、すでに刊行されていた創世記などをみると、個人訳のような形で出版されているのに危機感を覚えたこともあったと言われる。いずれにしても同年7月小崎弘道、植村正久、井深梶之助などの有志が集って協議、全国の教会から翻訳実務委員12名を選んだ。そして翌年1月25日に東京警醒社に集まった。⁽⁴³⁾

委員には、奥野昌綱、津田仙、安川亨、吉岡弘毅、大儀見元一郎、木村熊二、栗村左衛八、浅川広湖、植村正久、井深梶之助、小崎弘道、松山高吉、石原保太郎、三浦徹、新島襄、伊勢時雄、今村謙吉、市原盛宏、

古木寅三郎、森田久万人、金森通倫、和田秀豊、上原方位の23名であった。そして委員長小崎、書記井深、会計大儀見、翻訳委員に松山、植村、井深を選んだ。

毎月委員会を開いて外国側の翻訳委員会と対等に翻訳委員の権限を主張する検討に入ったが、常置委員会との交渉、資金面の問題で全国の教会に呼び掛けたが、翻訳委員の月給の4分の1も集めることができなかった。1885年4月から詩編の校正、ヨブ記、哀歌の翻訳も始まったが、同年10月外国側委員会より日本側委員会に対し、突然「廃止」の提案がなされた。一番大きな問題は、「資金の不足」であった。さらに、翻訳委員会の委員長であるヘボンによれば、テキストに対する日本側の知識不足があり、日本の教会は独立自給もままならず、各委員の動きもこの事業を支える財政的基盤を持たなかった。そして日本側翻訳委員会は、1886年1月22日の会合を最後に解散に追い込まれた。

旧約聖書の翻訳が次第に終わりに近づいた頃、ヘボンは自ら携わった訳業について述べているので引用したい。それは、弟のスレーター・ヘップバーンに宛てた1886（明治19）年11月9日付書簡の中でのことである。

「わたしはきょう雅歌の翻訳を終わり、旧約聖書の翻訳を完了しました。旧約聖書はいま詩篇とイザヤ書を除き全部訳了しました。本年中に全部おわると思います。わたしどものこの仕事が終わる前に、もう一度読みとおさなければならぬでしょう。これにはなお一年を要します。ここにとどまってこの仕事をやりおえるか否か、何とも申されません。わたしの健康によるのみです。日本人の助手の助けを得て、わたしが翻訳した旧約聖書の部分は、出エジプト記・民数記・レビ記・申命記・列王記上下・ヨブ記・箴言・伝道の書・雅歌・エレミヤ書・エゼキエル書・ダニエル書・ホセア書・ヨエル書・アモス書・オバデヤ書・ヨナ書・ミカ書・ナホム書・ハバク書・ゼパニヤ書・ハガイ書・ゼカリア書・マラ

キ書・哀歌、です。列王記上下・哀歌の一部・ヨナ書・ハガイ書・マラキ書は他の委員が訳し、改訂のためわたしに託されたのですが、わたしの改訂はほとんど新しい訳文になっており、大部分改訂したのです。わたしの翻訳文も、また改訂委員会の他の委員フルベッキ博士とファイソン師による訂正をうけました。』⁽⁴⁴⁾

ヨナハガイマラキ
『約拿哈基馬拉基合本』パイパー訳、1882年、7、6、10頁（北英）

ヨシュア
『約書亜記』ファイソン訳、1882年、89頁（米、大英、北英）

ソウセイキ
『創世記』タムソン・ファイソン訳、1882年、182頁、——地図（北英）。

1883年（米、北英）。1884年（米、北英）。1885年（大英）。1886年（米）。

1887年（米）。

シンゲン
『箴言』ヘボン訳、1883年5月、69頁（米、北英）。1884年（米、大英）。

1885年（大英、北英）1886年（米）。

シンゲンガカ
『箴言雅歌』ヘボン訳、1883年、69頁、16頁（北英）

サムエル
『撒母耳前書』ファイソン訳、1883年6月、127頁（米、北英）。1884

年（米、北英）。

サムエル
『撒母耳後書』ファイソン訳、1883年10月、102頁（米、大英、北英）。

1884年（米）。1888年（大英）

レッツオウキ
『列王紀略上』ファイソン訳1883年10月、113頁（米、大英、北英）。

1885年（北英）

エレミヤ
『耶利米亜記』ヘボン訳、1884年、200頁（米、大英、北英）。1885年（北英）

シシキルツキ
『士師記路得記』ファイソン訳、1884年9月、99,13頁（米、大英、北英）。

1886年（米）

レッツオウキ
『列王紀略下』ファイソン・ヘボン訳1883年、118頁（米、大英、北英）

エゼキエル
『以西結書』ヘボン訳、1884年、172頁（米、大英）

シュツエジプト
『出埃及記』ヘボン訳、1884年、154頁（米、大英、北英）

デンドウノシヨ
『伝道之書書』ヘボン訳、1884年、28頁（北英）

レヒ
『利未記』ヘボン訳、1884年、114頁、（米、大英、北英）。1887年（大英）

- 『^{ミンスウ}民数紀略』ヘボン訳, 1885年, 164頁(米, 大英, 北英)
- 『^{シンメイ}申命記』ヘボン訳, 1885年, 140頁(米, 大英, 北英)
- 『^{ダニエル}但以理書』ヘボン訳, 1885年, 58頁(米, 大英, 北英)。1886年(北英)
- 『^{ホセア ヨエルゼバニヤ}何西亞約耳西番雅書』ヘボン訳, 1886年, 30, 10, 9頁(米, 北英)
- 『^{アモス オバデア ミカナホムハバク}亞麼士阿巴底亞米積拿翁哈巴谷書』ヘボン訳, 1886年, 21, 3, 16, 7, 8頁(米, 北英)
- 『^{ゼカリヤ}撒加利亞書』ヘボン訳, 1886年, 30頁(米, 北英)
- 『^{ヨブ}約百記』ヘボン訳, 1887年, 94頁(米, 北英)
- 『^{ガカ}雅歌』フルベッキ・ヘボン・松山高吉訳, 1886年, 16頁(大英)
- 『^{エズラ ネヘミア エステル}以士喇書尼希米亞記以上士帖記』ファイソン・ヘボン訳, 1887年, 38, 56, 32頁(米, 北英)
- 『^{レキダイシ}歴代志略』2冊, ファイソン訳, 1887年上122, 下130頁(米, 北英)
- 『^{イザヤ}以賽亞書』植村正久・ファイソン訳, 1887年200頁(米, 大英, 北英)
- 『^{シヘン}詩編』フルベッキ・ウィリアムズ・松山高吉・植村正久訳, 1887年, 384頁(米, 大英, 北英)。1888年(米, 大英)
- 『^{ガカエレミヤアイカ}雅歌耶利米亞哀歌』フルベッキ・井深梶之助訳, 1887年, 16, 19頁(米, 大英)⁽⁴⁵⁾

1888(明治21)年2月3日, 東京築地にある新栄教会(旧新栄橋教会)において聖書翻訳事業完成祝賀会が開催された。1874年に新約聖書の翻訳委員会が動き出してから15年, 新旧約聖書を通して訳業に最後まで携わったのはヘボン一人であった。1859(安政6)年の来日以来, 聖書を日本にもたらすことを夢みて毎日毎日地道な訳業に関わってきたその積重ねがこのような形となってあらわれたのである。ヘボンが司会をつとめ, C. M. ウィリアムズの詩編19編の朗読, 本多庸一が日本語で同じ箇所を読み, J. ウィリアムズの祈祷, コ克蘭と稲垣信の感謝の演説, 奥野昌綱の祈祷とソーパーの祝祷で終わった。ヘボンの伝記を書いたグリフィスは, 完成祝賀会において, ヘボンがなし終えた沿革につい

て詳細に説明、外国人協力者の名前を挙げ、松山高吉と高橋五郎に対し、旧新約聖書を通して文体の統一への貢献に賛辞を送った。「博士はこの新しい日本語訳聖書は、純粋な日本語で、十分な教育を受けていない人にも分かるように、平易な文体で書かれている点を強調した。中国語をはじめとして、その他の外国語に一切とらわれていないこの聖書は、やがて数百万人の日本人に読まれ、日本の国語を純粋に維持するためにも貢献するであろう。英語聖書が、その純粋なアングロ・サクソンの言葉によって英国の言語に貢献してきているのと同様、日本語聖書は、将来確かに日本語に大きな影響を及ぼすであろう。」⁽⁴⁶⁾

こう述べながら片手に旧約聖書を一方の手に新約聖書を取り上げ、二つの聖書を一緒にして聖書が全巻出来上がったことを神に感謝した。人々はこの素朴な意味深いヘボンの動作を見て感動したという。「博士の終わりの言葉は雄弁であり、深い感動をもって語られ、博士自身の内に盛んに燃え上がる信仰の確信を人々の心に深く刻みつけた」と述べている。

当時文学界の最高峰にあった上田敏は、「敬虔の信徒等が刻苦して大成せし旧新約聖書なり」と賞賛し、詩編、イザヤ書、雅歌などの旧約聖書を名訳として讃えた。しかし、ヘボンは謙遜にも「甚だ貧しい翻訳」であり、字義上改正を加えるべき点も少なくないと言い、それは日本の学者に待つべきことで、自分は「序幕」のようなことを務めたまでであると語っている。⁽⁴⁷⁾ この旧新約聖書の完成は『和英語林集成』の編纂に裏打ちされたもので、外国語を日本語に訳すことが全く定着していなかった時代になされた聖書の翻訳は、日本の文化史上、文学史上、思想史上に計り知れない影響を与えることになったのである。

結びにかえて

ヘボン夫妻がわが国にもたらしたものは実に多彩である。ヘボンはニューヨーク市西42丁目159番地で病院を経営し医者として名声と富を得た。しかし5歳、3歳、1歳の男の子が次々に病死し、その悲しみは癒えることはなかった。そのような時、日米修好通商条約の調印を聞き、ミッション本部に日本への渡航を申し入れて認められ、ニューヨークの財産を処分して、44歳でキリスト教布教と医療奉仕のために夫人とともに来日した。ヘボン塾からは駐英大使林薫、総理大臣の高橋是清、最初の医学博士三宅秀、三井物産を創設した益田孝、日銀出納局長鈴木智雄、牧師山本秀焯、服部綾雄等優れた人材を輩出した。在日33年の長きにわたって横浜に住み『和英語林集成』の編纂、共同訳による旧新約聖書の翻訳、明治学院の創設に関わり、横浜に指路教会を創立し、近代日本における文化と学術に大きく貢献した。

ヘボンが日本に来日した最大の目的は、共同訳の聖書を翻訳することにあった。聖書和訳にあたって、どのように日本語に翻訳するかという視点から『和英語林集成』の編纂が不可欠であった。翻訳にあたって困難な問題は、第一にはキリスト教の独特な用語をどのように訳すか。キリスト教の「神」、「愛」については、中国でプリッジマン、カルバートソンの訳した新約、旧約聖書からヒントを得て、「上帝」の訳語から「神」という言葉に訳しているものを導入した。第二には、文体をどうするかという問題があった。日本では日本語が定まっていない状況があり、方言、武士の言葉、町人の言葉、女と男の言葉というものがあり、漢文にするか、平仮名にするか、仮名交じりにするかという問題があった。日本人助手は漢文調を主張、ヘボンやS. R. ブラウンたちは、聖書は誰でもが読めるものにしなければならないとし、「標準語」で仮名交じりの

文章とすることを決めた。こうして1888（明治21）年において旧新約聖書翻訳事業が完成、この聖書を「明治元訳」と呼んでいる。第三に「明治元訳」はテキストとして、「テキストゥス・レセプトゥス」、欽定訳、そしてブリッジマン-カルバートソンによる中国語聖書を参考に行っていた関係で、訳語において中国の影響が強かったことが指摘できる。

聖書の翻訳は、日本の文化史上、文学史上、思想史上に計り知れない影響を与えた。「明治元訳」については、この時点での最高の出来栄であるという評価がある一方で、翻訳上の欠点を主張する者もいた。それはギリシャ語やヘブル語に詳しい日本人の訳者が育っていなかったこと、同時に日本人の手を借りずに翻訳に関われるほど熟達した宣教師がいなかったという限界があったことは確かなことである。その後、聖書の改訳運動が起り、1917（大正6）年に『改訳新約聖書』の刊行がなされた。これを「大正改訳」と呼んでいる。しかし、この時旧約聖書については改訳されず、その後口語訳の改訳の声が上がり、1954年に『口語 新約聖書』、55年に『口語 旧約聖書』が刊行された。その後、70年にプロテスタント、カトリック両教会の共同事業として、共同訳聖書実行委員会が組織され、78年には『新約聖書 共同訳』が刊行され、そして87年に『聖書 新共同訳』として旧新約全巻が刊行された。

注

- (1) 1863年に英学塾をクララが開く。明治学院ではこの英学塾を創立の原点としている。1870年9月クララはヘボン塾の生徒をミス・キダー（Kidder, Mary Eddy）に託した。これがフェリス女学院の創立であり、日本の女子教育の始まりであると言われている。
- (2) 春名徹『にっぽん音吉漂流記』晶文社、1979年、38頁。なお、1837年7月、S. W. ウィリアムズ、医者のパーカー、オリファント商会のキング夫妻な

どが、漂流民を届けようとしてモリソン号が浦賀に入港したが幕府によって拒否された。ウィリアムズはこれが契機になって聖書翻訳を志した。マカオに帰ってから肥後の漂流民の庄蔵ら3名を引き取り、彼らから日本語を学び、『馬太福音書』を和訳した。その頃、S. R. ブラウンがウィリアムズと同居したことがあって、ブラウンが日本伝道を考えるようになった。その訳にはギュッツラフの影響がみられる。なお、ヘボンは『和英語林集成』を編纂する時にメドハーストの『英和和英語彙』、イエズス会宣教師が出版した『日葡辞書』を参考にしたと書いているが、木村一氏は、『和英語林集成の研究』のなかで、それに加えて『和英語林集成』の手稿の段階で、見出し語の採録や漢字表記等の面で、1855年に刊行された森楓齋によって編纂された『雅俗幼学新書』等の辞書を参考にしたことを明らかにしている。

- (3) 現在『和英語林集成』そのものとして入手しやすいものとしては、J. C. ヘボン『和英語林集成』講談社学術文庫がある。代表的な研究書としては、この書の手稿を覆刻し、解題を付けた形で出版したものに木村一・鈴木進著『J. C. ヘボン 和英語林集成 手稿翻字・索引・解題』三省堂2013年がある。また『和英語林集成』そのものの研究では、木村一著『和英語林集成の研究』明治書院2015年がある。
- (4) 1862年1月27日付ヘボン書簡、岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館2009年 105頁
- (5) 1866年9月4日付ヘボン書簡、同上、教文館2009年、198頁
- (6) 山口豊編『岸田吟香『呉淞日記』影印と翻刻』武蔵野書院2012年による。
- (7) 1861年2月14日付ヘボン書簡、岡部一興編・高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009年、75頁
- (8) 海老沢有道『日本の聖書』講談社学術文庫1989年、147頁
- (9) 1861年2月14日付ヘボン書簡 岡部一興編『ヘボン在日書簡集』教文館2009年75頁
- (10) 1861年4月17日付ヘボン書簡 同上、81頁
- (11) 1862年2月18日付 S. R. ブラウン書簡 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』日本基督教団出版局、1965年、87頁
- (12) 1862年11月8日付 S. R. ブラウン書簡 同上 112頁

聖書和訳とヘボン

- (13) 1861年2月14日付ヘボン書簡 岡部一興編『ヘボン在日書簡集』2009年、75頁
- (14) Griffis William Elliot “Maker of the New Orient, Samuel Robbins Brown, Pioneer Educater in China, America, and, Japan. The Story of his and Work” New York F. H. Revel, 1902 W・E・グリフィス著、渡辺省三訳『われに百の命あらば』キリスト新聞社1985年、212頁
- (15) 「安藤劉太郎の耶蘇教探索報告書」小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』日本基督教団出版局1973年、328頁
- (16) この宣教師会議は、1872年9月20日から25日にかけて行われ、S. R. ブラウンが議長であった。同年3月10日日本基督公会がJ. H. バラによって創立された。この公会は無教派主義的な教会として、日本に一つなる教会を目指して設立され、J. H. バラとS. R. ブラウンの協力のもとに展開された。
- (17) 翻訳委員社中といわれる翻訳委員会は、1872年9月に決議されたが、実際に動き出したのは、74年3月25日からであり、1880年3月1日でこの議事録は終わっている。この委員会の動向については、書記であったD. C. グリーンによる議事録がある。Z. イエール「明治初年の新約委員会に関する新資料」“Record of the Committee for the translation of the Bible into the Japanese Language”『聖書翻訳研究』No.23 DEC. 1985、日本聖書協会
- (18) 1874年9月25日付ヘボン書簡高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣新書1976年、116～117頁
- (19) 佐波亘・小澤三郎共編『植村正久と其の時代』復刻再版 第4巻教文館 1976年 180～181頁
- (20) ネイサン・ブラウン訳『志無也久世無志與』復刻版 別冊著者 川島二郎 監修秋山憲兄 新教出版社2008年
- (21) 田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房1997年、618頁
- (22) 同 上 620頁
- (23) 同 上 635頁
- (24) 川島二郎著『ネイサン・ブラウンと「志無也久世無志與」』（復刻・別冊）2008年7頁参照 ネイサン・ブラウン著『志無也久世無志與』は、

日本に数冊しか見つからない稀観本のために、2008年に川島氏が復刻した。この新約聖書は、1879年8月1日に全巻の訳業が完了、一方聖書翻訳委員会訳の新約聖書の全訳が完了したのは同年11月3日で、3カ月早かった。

- (25) 川島第二郎著『ネイサン・ブラウンと『志無也久世無志與』(復刻・別冊) 91頁参照
- (26) 1874年4月3日付 S. R. ブラウン書簡, 高谷道男編訳『S. R. ブラウン書簡集—幕末明治初期宣教記録』日本基督教団出版局1965年, 304頁
- (27) 1865年10月6日付 S. R. ブラウン書簡, 同上, 159頁～160頁。また『日本の聖書—聖書和訳の歴史』を著した海老澤有道も, 「翻訳の原本となるギリシャ語のテキストは「ゼームス王欽定英訳(テキトウス・レセプトゥス)の原本による」(217頁)を用いたと述べている。
- (28) 1865年10月31日付 S. R. ブラウン書簡, 同上, 160頁
- (29) 岡部一興「資料紹介 オーバン神学校に学んだ人々」『明治学院大学キリスト教研究所 紀要 第47号』2015年1月参照
- (30) 1884年12月26日付ヘボン書簡, 岡部一興編『ヘボン在日書簡集』教文館2009年, 395頁
- (31) 1881年3月16日付ヘボン書簡, 同上, 365頁～366頁
- (32) 分冊発行された新約聖書のうちヘボンが訳した聖書は, ブラウンとの共訳(4つ)を含めて新約聖書27のうち18を数える。
- (33) 1879年10月31日付ヘボン書簡 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣新書1976年, 140～141頁
- (34) 山本秀煌編『日本基督教会史』覆刻版 改革社, 1973年, 146～147頁
- (35) 海老澤有道『日本の聖書—聖書和訳の歴史』講談社学術文庫1989年 228頁～229頁とヘボンの書簡も参考にした。
- (36) Z. Yelle “Record of the Committee for the translation of the Bible into the Japanese Language” 「明治初年の新約委員会に関する新資料」『聖書翻訳研究』No.23 DEC. 1985, 日本聖書協会
- (37) 1885年8月15日付ヘボン書簡, 岡部一興編『ヘボン在日書簡集』教文館2009年, 395頁
- (38) 『横浜開港と宣教師たち—伝道とミッション・スクール』有隣新書2009

年, 105頁

- (39) 海老沢有道『日本の聖書』講談社学術文庫1989年, 219頁参照
- (40) 1872年7月24日N. ブラウンはシャーロット・マリット (Charlotte W. Marlit) と再婚, 73年2月7日に横浜に到着, 同年3月2日に「横浜第一バプテスト教会」をストッダート宣教師を立会人として彼等宣教師夫妻4人で創立した。前年の3月10日に日本基督公会が創立, 日本で二番目のプロテスタント教会となった。74年4月N. ブラウンは息子のピアスを私設伝道印刷技師として来日させ, 居留地80番 (翌年67番に移転) にミッション・プレスを作った。彼は世界共通のローマ字表記法コズミック・アルファベットを適用する機会となると考え, それを聖書の翻訳に応用した。「翻訳委員会」の聖書が木版刷りであったのに対し, ミッション・プレスに2台の印刷機を持ち込んで活版による聖書の印刷を行った。川島第二郎著「ネイサン・ブラウンと『志無也久世無志與』」, 覆刻『志無也久世無志與』別冊 新教出版社2008年参照, 48～51頁
- (41) ネイサン・ブラウン訳『現代仮名字本 新約全書』新教出版社2011年, 1頁
- (42) 山本秀煌『日本基督教会史』覆刻版, 改革社1973年, 148～149頁
- (43) 鈴木範久『聖書の日本語』岩波書店2006年, 102頁から106頁
- (44) 1886年11月9日付ヘボン書簡 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣新書1976年 217～218頁
- (45) 海老沢有道『日本の聖書—聖書和訳の歴史』講談社学術文庫1989年 278頁～281頁とヘボンの書簡も参考にした。
- (46) William Elliot Griffis, *Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates A Life Story of Toil for Christ*, The Eestminster Press Philadelphia 1913 W・E・グリフィス著, 高谷道男監修・佐々木晃訳『ヘボン—同時代人の見た』教文館1991年
- (47) 財団法人日本聖書協会『日本聖書協会100年史』1975年 60～61頁
〔付記〕本稿は, 2015年6月30日御茶ノ水の在日韓国YMCAアジア青少年センターにおいて, 韓国基督教歴史研究所主催にて開催された「李樹廷のマルコによる福音書翻訳 130周年記念国際シンポジウム」において発表したものに基づいている。